

里美人千代伝

通学路

文

◆前置き

犬も歩けば棒に当たる。

犬が西向きゃ尾は東。

犬猿の仲、負け犬、犬神家。

あとはなんだったか……と、覚えきれないほど“犬”に関する言葉や熟語、諺などは数多くあります。

それは古来より犬が、家畜として、そして良きパートナーとして、人間と深く関わってきた証明でもありましょう。

それに人間の身体の一部に、犬の名が付いた箇所がありますね。

そう、犬歯。

門歯の両側に尖った歯を一般に犬歯と呼んでいますが、人間の犬歯は糸切り歯とも呼ばれています。

それを犬歯と呼ばれる所以は、もちろん犬の犬歯からでしょう。

ちなみに犬の歯は四十二本。

他の歯も、犬歯のように鋭く尖っています。歯というよりも、牙といった方が相応しいでしょう。

そんな鋭い牙をチラつかせている犬の食事光景をじっくり観察していると、食べ物はあまり噛まずに、呑み込んでしまっているのが解ります。

犬の歯は、人間のように噛み砕くのではなく、切り裂くということに重点が置かれている仕組みとなっています。これは、狩りで獲った獲物の肉を引き千切りやすいように、進化したのではと考えられます。

そもそも犬とは……、おっと。

今回は、犬についての講釈やウンチクをたれるものではありませんでした。

語るべきお話しは、ある一匹の犬と、一人の少女のハートフルで愉快なお話。

それでは、はじま……。

ああ、それと大切な事を忘れていました。

注意事項を一つ。

残念な事に、この話には猫が一切できません。

もし猫好きな方が、ご拝読しているのでしたら、今すぐ犬好きになるか、猫と同じぐらい犬を好きになる。

それか『犬』を『猫』と思うようにしてください。

それは無理？

何を仰いますか。猫と犬の遠いご先祖さまは、元々是一緒だという説があります。

その証拠に犬は、“ネコ目”、イヌ科イヌ属に分類されている哺乳類。

そんな訳で、犬を猫だと思っても何の問題はありません。

ただ、その場合は人前で犬を見て、『あれは猫』だと、指差して言わないでください。

言ってしまうと、アナタ様が指を差され、変な目で見られてしまいますので、ご注意ください。お願いします。

さて前置きが長くなりましたが、本編を始めさせて頂きたいとおもいます。

それでは『里美ハチ犬伝』の始まり、始まり――

◆第一話 里美と白い犬

里美は学校に行く途中、限りなく真っ白な犬を見た。

市立の小学校に通っている藤井里美は、小学三年生になって早一ヶ月。ショートカットの髪型とショートパンツが相まって、里美の活発さを表しているほどの元気っ子である。

既に桜の花は散ってしまったが、まだ里美の心は、桜が満開しているように爛漫だった。

背中に背負う赤いランドセルの端っこ辺りがくたびれ始めていた。

最近では、ランドセルに教科書は入れず、カラフルでスタイリッシュな補助カバンに入れていた。

つまり空っぽのランドセルを背負っているのだ。

何故そうしているのかというと、小学三年生にもなれば、少しファッションに目覚めてしまうお年頃。

皆と同じランドセルに嫌悪感を抱き、人とは違う個性と独自性を出したい……というより、魅せたいのだ。

そこで決められた枠内（ルール）の中で、それが可能なのが、唯一自由に持ってきてもよい補助カバンなのである。

しかし、学校の規則でランドセルは必ず持って来なければならない、里美は渋々と軽いランドセルを背負っているのである。

ランドセルの本来の役割を果たせておらず、小学生を示すシンボルでしか意味を成していなかった。

そもそも育ち盛りの時に、片方に集中して重いものを持つのは、体の軸バランスが崩してしまうので、非常によろしくないのだが、そんなことを小学生の里美が気にする訳は無かった。

そんな天使の羽のように軽いランドセルを背負い、筋トレができるほどに重い補助カバンを手を持って、七時三十分から一時間は車の通行が制限された通学路を歩き、いつも通り学校へ向かっていた。

その道中で、限りなく真っ白な犬を見たのである。

その白さは朝食で毎日食卓に出されている、お腹に優しくカルシウムの吸収に良いビタミンDが配合されたスーパー牛乳と同じぐらいの白さだった。

あまりにも白い犬だったために、里美は思わず足を止め、その犬の様子を凝視し始める。

「野良犬なのかな？」

里美はそう呟いた。

犬の首に首輪は付いていない。しかし、野良にしては白く綺麗だった。

白い犬の大きさは中型犬ほどのサイズで、三角形の小さな耳をピンっと立たせ、目じりが吊り上がった目、そして背中の上に巻いた尾が愛嬌を振り撒きまくっていた。

登校時間は、まだ余裕があるから大丈夫と、里美は暫く白い犬を眺めることにした。

すると白い犬は電柱の前に止まり、左後ろ足を上げては用を足そうとした。

しかし、左足を上げたものの、その左足を一旦下ろし、身体の向きを反対に入れ替え、今度は右後ろ足を上げた。

何かが気に食わないのだろうか。

それとも、ポジショニング（位置）がしっくり来なかったのか、また右足を下ろし、左足を上げる。そしてまた左足を下ろし、右足を上げた。

里美は、最近まで母が毎日やっていた、家庭用ゲームでエアロビ体操のような運動をしている母の姿を思い浮かんでしまい、それが犬と重なり思わず「ぷっ」と、吹き出してしまった。

流石は犬。小さな音だったが、その音で里美に気がついた。

お互い様子を伺うように見つめ合う。

「おいでよ！」

里美が手招きしつつ誘うものの、犬はウンともスンとも。

『オマエは、何をしているんだ？』と言っているような表情で、白い犬は首を傾げた。

痺れを切らした里美は、白い犬に近づこうと一歩前へと踏み出すと、白い犬は後ろ足を一歩後ずさりした。

また里美が一歩前へと踏み出す。

すると白い犬は、また一歩後ずさり。

里美が前へ、犬は後ろへ、里美が前へ、犬は後ろへ。

「……………」

近づけば遠ざかる。そんな足しても引かれる、差し引きゼロのヤキモキする状況に少しムツとする里美。

そこで里美は、今度は反対に一歩後ずさりしてみると……。

白い犬は前へと歩み出る。

里美が後ろへ、犬は前へ、里美が後ろへ、犬は前へ。

まるで、犬にバカにされているような。いや、ハタから見れば里美と犬との光景は非常にバカゲタ様子。

その証拠に通学路を通り行く里美と同じようにランドセル背負った児童達が、里美と犬とのやり取りを横目で何やっているんだろうと、？（ハテナ）マークを浮かべている。

当人は、そんなことを気にしてない。今、里美はあの犬を触りたかったのだ。

しかし、このままでは犬に触ることも近づく事もできずに、埒が明かない。だが、知恵が働くのが人間。

そこで里美は考えた。

「そうだ！」

里美は右足を一步下げた瞬間、素早くその足を前へと踏み出した。

まるでブランコのような振り子の動きだった。

すると白い犬は後ろへ下がるものだと思ったのか一步前へと歩み出ており、里美と白い犬の距離は二歩分縮まった。

同様の動きを今度は左足でやってみる。今度も犬は一步前へと。

里美との距離が縮まっているのを白い犬は、気付いているのかいないのか。

そんなブランコ移動を繰り返していき、段々と近づく。

(よし、もう少しで……)

しかし、犬も犬ではあるが、馬鹿ではない。

野生の危機センサーが働いたのか、里美が白い犬に触れるあと一步のところで、

『!』

遠ざかっているはずなのに近づいている事に気付いたのか、犬は慌てて尾っぽを里美の方に向けて、今まで近づいた距離がゼロどころではなくマイナスになるほど、遠く離れてしまった。

「あ～、もう!」

残念がる里美。また近づこうとするも警戒感が増してか、里美が一步近づけば白い犬は二歩三歩と後ずさりして距離を取る。

後を追いかけてしようとするも、通学路にちらほらいた児童達の姿が見えなくなったことに気付く。

里美の体感時間的に、そろそろ学校へと急いで向かわないと遅刻してしまうのではと、焦りを感じてしまう。

里美は名残惜しそうに遠くにいる白い犬に向かって、

「それじゃーね。バイバーイ」

後ろ髪を引かれつつも、里美は元気良く学校へと駆けて行った。

遠ざかり小さくなっていく里美を、白い犬はただジッと眺めていたが、ゆっくりとその後を追いかけていくのであった。

◆第二話 宏子と渚、そして掛布

里美は余裕を持って、チャイムが鳴る五分前に学校へ到着することができた。

「これなら、もうちょっとあのワンちゃんと居れば良かったかな」

走ったわりに息一つ切れていないのは、若さと健康的な身体を持っている証しでもあった。

廊下を走るような速さで歩く。

つまり走歩きで、自分の教室...三年一組に入ると、既に大半の生徒が来ており、ワイワイガヤガヤと賑やかだった。

「おはよー」

と、教室にいる皆に朝の挨拶をしつつ、早足で自分の席へと向かう里美。

そして席に着くと隣の席に座っていた、短いツインテールの女子が声をかけてきた。

「里美ちゃん、おはよー。今日は、いつもより遅かったね。どうしたの？」

彼女の名前は小林宏子。

活発な里美とは対照的に、もの静かで素朴な性格だけど、里美と仲の良い友達の一人。

「おはよー、ヒロちゃん。いや～、それがね。変で面白い犬がいてね。それを見てたら、遅くなっちゃった」

「変で面白い犬？」

「うん、そうなの！ 私が近づこうとするとね、逃げるの」

「.....えっ？」

「私がね、一歩近づこうとしたら、犬の方も一歩下がるというか、逃げるの」

「それって.....普通のことなんじゃないの？」

宏子は自分が思ったことを素直に口にした。

「えっ」と、意外な感じで驚く里美。

「私のところの近所の犬も、私が近づいたら逃げちゃうんだよ。可愛いチワワなんだけど、ナデナデしたいのにな」

「へ～そうなの……。ああ、それに私が一步下がると、その犬が私に一步近づくんだよ」

「それって……」

宏子は、その光景を頭の中でイメージしてみたが、あまりにも馬鹿馬鹿しいシーンだったために思わず嘔き出してしまう。

突然の笑いに里美は「なに？」と訊くと、

「え…いや、ちょっと……」

今度は苦笑いで返した。

そんな二人の会話に釣られて、里美の後ろの席に座っている男子が声をかけてきた。

「なんの話しをしてるんだ、藤井？」

「渚くん。それがね、面白い犬を見たの」

「面白い犬？ どんな？」

里美は先ほど宏子にした話を、スポーツ刈りが似合う少年—小久保渚—にもするも、渚は頭を搔きながら、

「それ、普通じゃないか？」

素っ気無く感想を漏らした。

「だよね」と、渚の意見に賛同する宏子。

「あれ？」

里美は「説明は間違っていないのに、どうして伝わらないのかな？」と、首を傾げる。
「近づいたら逃げるなんて、野良犬とかなら当然だろ。俺もそういうことはあったよ」

「逃げるといっても……う～ん……」

どうすれば、あの状況を明確に伝えられるのかと言葉を探すが、どうしても見つからず言葉に詰まる里美。

正しい説明をするにも、勉強は大切だと実感させられる瞬間であった。

「面白い犬って言うから、てっきり人面犬なんかと思ったよ」

「ジンメンケン？」

聞きなれぬ用語に、思わず聞き返す里美。

「あ、知らないの？ 犬の身体なのに、顔が人間のおっ……」

渚の話の途中にも関わらず、内容を察知した宏子は一瞬で青ざめ、

「いや~~~~~！」

と、悲鳴に似た声を上げ、両耳を塞いだ。

突然の叫び声に、何事かと里美と渚以外の生徒達も宏子に注目する。

「ああ。ヒロちゃん、怖い話が苦手だからね」

「怖いか？ 人間の顔が付いている犬なんて、面白いと思んだけど……」

しかし、当の宏子は、

「聞こえない！ 聞こえない！ あー！ あー！」

渚の声が聞こえないように大きな声を出し、呪文のように繰り返していた。

「ヒロちゃんには、怖いみたいだね」

そうこうしていると、チャイムが鳴り響く。

「あ、早く準備しないと」

里美は、まだ教科書などを出していない事に気づくと、慌てながらカラフルでスタイリッシュな補助カバンから教科書や筆箱などの勉強道具を取り出し、少々粗雑に机の中に仕舞い込んだ。

そして、補助カバンは机の横にかけ、本来の役目を持たせて貰っていないランドセルを、教室の後ろに設置されている、通称“物置ボックス”へと置きに行こうと席を立つと、未だに両耳を抑え、呪文を唱えている宏子の姿が目に入った。

「ヒロちゃん……。ほら、もう怖い話はしてないよ」

ポンッと宏子の肩を軽く叩くと、大きく肩をビクッと震わし、ゆっくりと里美の方を見る。

「え、あ……」

平静を取り戻すと、先ほど青くなっていた顔に赤が浮かぶ。

そんな恥ずかしさで縮こまる宏子を見て、里美は愉快そうに明るく笑った。

すると、大人の女性が教室に入ってきた。

「あ、二宮先生だ」

里美の担任である二宮先生は、教師歴七年。

ギリギリ二十代の二十九歳であるが、古臭さを感じさせる丸メガネをかけており、少しパーマがかかったセミショートの髪型が、おばさんっぽさを漂わせていた。

里美は、そそくさとランドセルを置きに行く。

他のクラスメート達は全員着席を終えているので、急かされているような感じがして、出来るだけ早くランドセルを置き、席に戻った。

そして、里美が着席すると同時に学級委員長が、

「起立！」

と号令をかけると、一同は従い、おなじみの朝の挨拶が行われる。

「おはようございます！」

バラツキがあるものの大きな声が教室に響く。

「はい、おはようございます。それでは、出席を取ります。青木くん」

。あ行から順々に苗字が呼ばれ、その苗字に該当する生徒は元気良く「はい」と返事していった。

そして、か行に入り、

「掛布くん……」

と苗字を呼ぶも、返事は返ってこない。

「掛布博和くんは……」

二宮先生は、一番後ろの空席となっている机を見ると、小さなため息を漏らした。

掛布の親御さんから何も連絡は無い。

という事は――

「掛布くんは、また遅刻なのね……」

そう言うや、出席簿に遅刻マークを書こうとすると、廊下から勢い良く駆けてくる音が響き渡ってくる。

次の瞬間、教室の扉が開かれると同時に第一声、

「ギリギリ、セーフ！」

“自分は間に合った”とアピールのために、わざとらしく大げさに声を張り上げたのは、クセの強い天然パーマが印象的で、タレ目がちの少年であった。

少年は不敵な顔で、堂々と教室に入ってくる。

二宮先生は落ち着いた口調で、その少年に真実を告げる。

「バリバリアウトですよ。掛布くん」

「え、マジっすか？ おかしいな……。俺の腹時計では、まだ八時二十五分ですよ」

「教室の時計を見なさい。今、何時ですか？」

時計の針は、八時三十八分を差していた。

たった八分だろうが、遅刻は遅刻。

こういった規則厳守は、子供の頃からしっかりと教えていかないと、自分に緩いグーたらな大人になってしまうものだ。

だが、そんなことは露知らずの掛布は言い返す。

「ていうか、これには訳があるんですよ、先生！」

「どんな訳ですか？」

眉間にシワを少し寄せる二宮先生。

だが、掛布はそんな微妙な変化に気付いておらず、訳を述べる。

「来る途中、川で溺れている犬がいて、その犬を助けていたんです」

「嘘を言わないの。川の中に入っていたのなら、服は濡れているんじゃないの？」

「だ・か・ら。服が濡れたから、家まで戻って着替えに……」

言い訳を重ねる掛布に対して、めったに怒らないと評判の二宮先生も流石に、

「言い訳をしない！ 遅刻は遅刻。三年生になったんだから、ちゃんとしっかりしなさい」

厳しい口調で掛布に注意を述べる。

「それに廊下を走らない。さっき走ってきたでしょう！」

「だって、走らないと間に合わないと思って……ってか、なんだよ先生。さっきは遅刻はするなと言ったクセにさあ、廊下を歩いてきたら遅刻しちゃうよ」

「走っても遅刻しているんでしょう！ 十分前登校を守ってれば、遅刻はしないでしょう！」

二宮先生と掛布のやり取りが漫才のようで、クラスメート達から呆れた笑いが出る。

「掛布くん、相変わらずだね～」

そう宏子が里美に耳打ちをすると、里美は笑って返した。

二宮先生は少しグッタリとし、これ以上掛布との押し問答する時間が無いと半ば諦めがちに、「もういいから」と席に着くようにと促すと、掛布は素直に二宮先生の言う事に従った。

二宮先生は教師になって、早七年。

毎年、掛布みたいな問題児は必ず一人は居るものである。そんな生徒に対して上手く対処していくことが教師として宿命であるが、流石に毎年続けるのには疲れるものだ。

さっきも申した通り二宮先生はまだ二十九歳ではあるが、心の年齢は三十路を超えて、四十歳を過ぎているようだった。

「静かに！」

二宮先生は掛布の所為で、騒がしくなっていたクラスに一喝した。
決して、地の文を読んだからではない。

自分にも言い聞かせるように発した言葉で、自分の心を落ち着かせる。

そして、いつもより強く掛布の欄に、クッキリと出席簿に遅刻マークを記入し、中断された出席確認を再開した。

そんな朝の光景をよそに“招かれざる客”が、四本足で里美たちの小学校に近づいていることに、当然ながら誰も知る由は無かった……。

「ワン」

◆第三話 珍客の来訪

それは二時限目の算数の授業中だった。

授業内容は二桁×一桁の掛け算。

計算問題を解いていると頭の中がオーバーヒートを起こしてしまう。
それは成績優秀の宏子にも該当することだった。

そこで宏子は、窓側の席に座っている利点を活かし、少し気分休めとして外の景色—グランド—を眺めていた。

すると、広大なグランドに見慣れぬモノが徘徊しているのを発見したのである。

「あれは……犬？」

遠目ではハッキリと姿は確認できないが、おぼろげだが四本足の白い生き物—犬—であることは解かった。

授業そっちのけで、その生き物を追いかけてみようとしたが——

「それじゃ次の問題を……小林さんと、隣の藤井さん。解いてください」

突然、二宮先生に指名され、慌てて返事をする。

「あ、はい」

席を立ちつつ、再び窓の外を見たが、

(あれ……どこに行ったんだろう?)

白い犬は何処かに行ったらしく、姿を見失った。
ぼーと、立ち尽くしている宏子に里美が声を掛ける。

「どうしたの、ヒロちゃん？」

「あ、うん。なんでもないよ」

後ろ髪を引かれながら、里美の後を追いかけていく。

黒板には、

$$\text{--- } 2 \times 4 \text{ ---}$$

$$\text{--- } 3 \times 7 \text{ ---}$$

と、白いチョークで大きく書かれていた。

「それじゃ、一問目は小林さん。二問目は藤井さんが解いてください」

二宮先生はそれぞれが担当する問題を指示する。

里美は内心、一問目の問題を望んでいたが、渋々とチョークを二本手に取り、その内一本を宏子に渡してあげる。

「ありがとう、里美ちゃん」

同じチョークで問題に挑んでいるはずなのに、宏子はそのチョークを動かし、特に悩むことも無く計算式を書いていき問題を解いていく。

しかし、里美の手は止まったままだった。

里美は掛け算の暗算が、特に七の段が苦手だったこともあり、頭の中で計算しながら片手の指でも計算するも、当然ながら指の数が足らず、行き詰ってしまう。

計算に四苦八苦していると、どこからとも無く野次が飛ぶ。

「なんだ藤井、そんな簡単な問題も解けないのかよ」

里美はムツとした顔で振り返り、野次を飛ばしてきた問題児一掛布博和一を睨む。

「うるさいな。今、考えている最中じゃない」

「そんなの考えなくても解けるだろう」

掛布は、あざけるかのような憎たらしい表情を浮かべていた。

里美と掛布は犬猿の仲とまでは言わないが、掛布は誰からも犬猿の仲なのである。

「だったら、あんたが解いてみなさいよ」

「へん、そんなの簡単だよ」

そう言うと掛布は立ち上がり、意気揚々と前に出ようとしたが、

「掛布くん。チョッカイを出さない、来ないの」

二宮先生が制止し、そして問題に悩む里美にアドバイスを与える。

「藤井さん。間違っても良いから自力で解いてみなさいね。教室は間違える所。間違えて、何が間違っているのかが気づく事が大切なんですからね」

そうは言うものの。

皆の前に出るという事が、恥ずかしく思えるようになる年頃でもあり、そんな皆の前で間違えるという事は、歳を取る事によってより“恥”を感じてしまう。

その為か学年が上がるにつれて、率先として手を上げて答える生徒が少なくなってしまうものである。

しかし、里美の場合は皆の前で間違えるよりは、間違えて馬鹿な相手（掛布）に馬鹿にされる事が嫌な訳で、ここは何としてでも正解しなければならないという使命が生じてしまっていた。

だが、それが変にプレッシャーを感じてしまい、頭をフル回転するものの「七一が七、七に十四、七三、二十...二？」と、単純な計算ミスを出かしてしまう。

「さ、里美ちゃ.....」

悩む里美を見かねて宏子が助け舟を出そうとしたが、

「ほら小林がまだかと、待ってるぞ！」

掛布のツッコミが一步早く、言うタイミングを逃してしまった。

「わっ、分かってるわよ！」

掛布の何気ない一言は「独りでも問題は解け」という釘を差すもので、これで里美から宏子に助言を求めることが封じられた。

どちらにしろ、里美自身が解かなければならないのだが、あらためてたった一人で問題に挑まなければならぬという重圧を感じる。

重圧は頭の回転を鈍くしてしまい、それがチョークを動かす腕にも連動する。

そんな里美に対して—————

宏子が心配そうな顔で見つめ—————

二宮先生は黙って様子を伺い—————

掛布はニヤニヤと薄笑いを浮かべる——

里美は皆の期待を一身に背負い、ゆっくり、そして、少しずつ計算式を書き解いていく。

そして、百の位の数字を書こうとした、その時だった——

「うわっ！ 犬だ！」

誰かが声をあげた。

すると白い犬が素知らぬ顔で教室に入ってきたのである。

教室にいる全員が一斉に突然の珍客へと視線を向け、たった一匹の犬の登場で場は騒然となり、もはや授業どころでは無くなった。

学校とは特殊な空間だ。

漫画とかゲーム機など普段持ち込んではいけないものがあるだけで、テンションが上がってしまう。

これが自分の家とかだったら、そんなにテンションは上がりはしないのだが……。だから学校に、漫画とか持ち込みをしてしまう生徒がいるのでしょうか。

話しが少し脱線しましたが、それは犬といった動物も同様。

教室に普段いないはずの“モノ”が現れた。それだけで心が、はしゃぐお祭り騒ぎ。

好奇心旺盛な生徒――特に男子たちは犬を取り囲んで触ろうとしたり、女子たちは突然の来訪者に怯え、自分の席を立ち犬から距離を取っていたりした。

そんな騒動を皆とは少し離れた場所――黒板の前で眺めている里美と宏子。

クラスメート達の間から垣間見える犬の姿に里美が思わず声を上げた。

「あ、あの犬は！」

「え、里美ちゃん。どうしたの？」

「あの犬だよ、ヒロちゃん。私が朝見た、面白い犬」

「え……あれが？」

里美が指差す犬は、宏子には何処からどう見ても雑種の野良犬……つまり普通の犬に見えた。

その犬を取り囲んでいる男子達は「お手」だ「お座り」だと命じているが、ピンっと立てている三角形の耳に声が聞こえていないのか、それとも言葉の意味が分からないのか、それらを見無視し、ただ立ち尽くしていた。

そして誰かが犬に触ろうとすると、犬は口をガッと開き近づいてきた手を噛もうとした。

手を差し出した生徒は素早く引っ込め難を逃れ「あっぶね～」と冷や汗をかいた。

他の生徒達も触ろうと手を差し出し始め、誰が一番最初に犬に触れるかのゲームを遊んでいるようだった。

「み、みんな。遊んでいないで、早く犬を教室の外に出してください！」

怯えるグループの生徒達を盾にして、身を震えている二宮先生が注意をしてきた。

だが、その注意は、先ほどの掛布を注意した時とは違って、弱弱しいものだった。

「あれ。もしかして先生、犬が苦手なんですか？」

生徒の問いに凶星を付かれ、さらに戸惑い困惑する二宮先生。その様子に『ワッハハハ』と笑いが起こる。

二宮先生にとっては笑い事では無いが、3年1組の生徒たちにとって、大の大人が、たかが犬如きに恐がっているのは新鮮な体験だった。

しかし犬を追い払おうとしても、まったく動じず、言うことを聞きはしない。そして触れようにも、牙が襲い掛かってくる。

どうしようかと生徒たちが思案していた時、掛布が我こそはと前に乗り出した。

「やっぱり、ここはオレが何とかするしかないな。人間様が犬よりも偉いということを見せ付けないとダメなんだよ。下に見られていると、言うことを聞かないと言うしな」

どこかのテレビの番組で得た知識を口に出しつつ、

「いいか、見てろ！」

スうと息を吸い、

「お手っ！」

高圧的な態度を醸し出し、普段よりも数段低く重い声で言い放つと同時に、右手を白い犬の前へと差し出した。

そして白い犬は、左後ろ足を高々と上げ、掛布が差し出した手に“しっこ（尿）”をかけ放ったのである。

掛布はもちろん、周りの生徒達も何をされたのか理解する事が出来ず、場の空気が一瞬静まった。

そして、掛布がその尿の温もりを感じ取り、現状を理解した瞬間、

「.....ぶっ△×ヒィ#×◎□！！」

言葉にならない叫びをあげた。

そして今度は、周りから大爆笑の渦が巻き起こった。

「何やってんだよ、掛布！」

「ウワっ……バッチィ！」

「近寄んなよ、掛布！」

「電柱と勘違いされてやんの」

憐れみと馬鹿にする言葉を投げかけられ、掛布の近くにいた者は三步ほど距離を取った。

「どうわ〜〜〜！ なにすんだよ、この馬鹿犬！」

怒鳴り声をあげ、しっこをかけられた怒りをぶつけようと、しっこをかけられまだ温もりを感じる右手を握り締め殴りかかろうとした。

だが、犬は自身の身に降りかかる危険を感じ取ったのか、突然走り出し、教室から飛び出していった。

「あっ。待て、この野郎！」

すぐさま掛布も後を追いかけると、数人の生徒も面白そうだと後を追いかけて教室を飛び出す。

その中に里美も含まれていた。

「里美ちゃん……」

宏子は、もう姿が見えない友の名前をボソッと溢した。

そして、プチ学級崩壊な状況になってしまった事に、二宮先生はただ呆然と立ち尽くし、うっすら涙を溢していたのであった。

◆第四話 追いかけてっこ

掛布たちが教室を飛び出すと、三年一組の教室での異様な騒がしさに気付き、様子を伺いに來ていた隣の教室一三年二組一の担任・堀尾先生と遭遇した。

タラコ唇とメタボリックのぽっこりとお腹が出ているのがトレードマークの堀尾先生は、授業中にも関わらず廊下を駆けていく犬と生徒たちを見て思わず、タラコ唇を震わせる。

「な、なんだ。あの犬は...てっ.....コラ！ お前達、まだ授業中だぞ！」

掛布たちは足を止めず、

「だって、二宮先生があの犬を捕まえろ、って！」

すれ違い様に、とっさに嘘を吐く。

「おっ、そうなの.....」

何となく納得しかけてしまうもの、続けざまに通り過ぎて行く生徒たちを見て、学校の常識と先生の使命を思い返す。

そもそも何故ここに犬が居るのかという疑問を訊こうとしたが、生徒たちは遠ざかっていく。

「いやいや、どういうことだ。どういうことですか二宮先生。二宮先生！」

代わりにクラスの責任者に事情を訊こうと、今度はメタボリックの腹を震わせ、三年一組の教室に入っていく。

それはさて置き、犬の後を必死になって追いかける掛布。

その後を追うクラスメート達と里美。

「待ちやがれ！」

掛布の呼び止めで止まるなら、お手でしっこはかけられはしない。

そのしっこをかけられた掛布は、ドタバタとマラカスを振るように手足を動かし、走り行く。

しっこをかけられた手で一発叩いてやらないと、掛布の怒りは収まらないようだ。
しかし犬との距離は、徐々に広がっていった。

やがてハアハアと息が切れかけ始めると、後方の生徒たちに次々と抜かれていく。

そして遅れて追いかけてきた一番後ろにいた、里美に抜かれる頃には掛布の足はフラフラとなり、

「ぜえ...ハア...ぜえ、オエ.....」

あえなくリタイアとなった。

「どれだけ体力が無いのよ」と、里美は内心でツッコミを入れつつも、掛布を無視して犬を追いかける。

掛布の恨みとは違って、里美の目的は――

「今度は何としてでも触るからねー！」

近づこうとして離れられた、朝での光景を思い返す。

そうこうしていると一足早く、犬は廊下の端に辿り着くと身体を傾け曲がり、スピードを落とさず階段を駆け昇り行く。

追いかける生徒たちは、一段飛ばしで駆け昇っていくものの、犬との距離は一向に縮まらない。

ちなみに犬の走る速さは、時速約五十k m（キロメートル）。

とあるオリンピックの金メダリストの陸上選手の時速が約四十k mであり、犬が如何に速いかわかるだろう。

その犬の脚力もさる事ながら、体力も群を抜いていた。

追いかけるクラスメート達も、先ほどの掛布と同様に息も絶え絶えとなり、次々とリタイアしていった。

だが、まだ廊下に足音が響き渡る。

犬は器用に走りながら振り返ると、まだ後を追いかけている人物を確認した。

里美だった。

追いかけたクラスメート達の中で唯一の女子にも関わらず、へばる事なく犬の速さについていく。

実は里美は、夏の運動会の徒競走や冬の校内マラソンなどで上位に入るほどの運動能力の持ち主。

去年の運動会で六年生の一番速い生徒と接戦を演じた徒競走は、今では伝説となっているのであった。

やがて三階の廊下の端に行き着くと、犬はスピードを緩めずに近くにある階段を駆け降りた。それを見て里美は、

「むむむ、なんの！ とう！」

秘技“十段降り”で、ピョンと軽やかにジャンプ降り！

だが着地衝撃は激しく、体のバランスが崩れ、階段の踊場で着地が失敗しそうになるも、

「おっとと、と！」

とっさに両手を壁に付け、自分の体を支え踏ん張って、転ぶことを回避した。

そして、すぐさまに壁に付いた両手を勢い良く押して、反動をつけ加速させると、残りの階段も再び“十段降り”……は流石に危険だと判断し、“五段降り”を繰り出して、残りの階段を二度に分けて飛び降りた。

そんなこんなで、里美は犬との距離を若干縮めることに成功した。

なお、この技は運動神経抜群の里美だからこそ可能な技なので、どんな人間でも真似をすると大変危険ですので絶対にしないように。

さて大抵の小学校の廊下の両端には昇降階段が築かれているものであり、里美が通う小学校も

例外に漏れない。

校舎の構造はコの字形となっており、里美たちの教室（三年一組）が在るのは北校舎の二階。

先ほど三階から降りて廊下を走っているという事は……。

「あ、里美ちゃん……」

宏子は教室の前の廊下を走り抜ける犬と里美に気付いた。

つまり、里美と犬はグルッと二階三階間を一周したことになる。

生徒たちは犬と里美の追いかけて観戦に夢中となっていたが、二宮先生と堀尾先生は、そっちのけで何やら話し合っていた。

明太子のようなタラコ唇をこれでもかと激しく動かす堀尾先生とは違って、重く唇を動かす二宮先生。

「二宮先生、何やっているんですか！ 犬が怖いとか、大の大人が何を言っているんですか！」

「……堀尾先生は、人面犬というものをご存知ですか？」

「人面犬？ ああ、昔そんな怪談めいたものが広まりましたね。それが？」

「実は私……小学生の時に“人面犬”を見たことがあるんです」

「えっ？」

突然のぶっちゃけ話しに、場の空気が重く凍り付く。

「あれは放課後の黄昏時。夕日が見事なオレンジ色でしたね。

それをバックに“ヤツ”がいたんです。

犬の体に、頭がバーコードハゲの五十歳くらいのおっさん……。

もうその姿で恐怖で身体が竦んでしまいましたね。

私に声をかけてきたんですよ。

“お嬢ちゃん、パンツ見せてな”ですよ。

もう三日三晩、その人面犬が出る夢を見てしまうぐらい、うなされてしまいましたね。

あんなものを生で見て、声を聞いて、しかも“お嬢ちゃん、パンツ見せてな”って。
いたいけな小学生にとってはとんでもない恐怖ですよ。
事件ですよ。
拷問ですよ。
それ以来、犬がですね。私にとって恐怖の大王となったんですよ……ははっ……」

ブツブツと過去のトラウマを語る二宮先生の瞳は生気を失い、乾いた笑いを溢していた。

「あ、いや……その、二宮先生。お、落ち着いて……」

「そういえば、あの人面犬のおっさんの顔……思い出したくないですけど、よくよく思い出せば堀尾先生に似ているような……」

「ちょっと！ 何を言っているんですか、二宮先生！ 失礼ですよ！」

そんな先生たちの話しをよそに、廊下では熱いデッドヒートが続いていた。

犬との距離は先ほどの一周で僅かに縮めたものの、里美はある懸念事項が思い浮かんだ。学校特有の作り一廊下の両端に階段がある一によって、“行き止まり”が存在しないのだ。

つまり袋小路に追い詰めることは出来ず、このままでは里美と犬、どちらかの体力が尽きるまで、この追いかっこは続くことになる。

そうこうしている内に、犬が再び廊下の端に辿り着き階段を昇ろうとしたが、階段の途中でバテている生徒の気付くと方向転換をした。

降り階段には行かず、北校舎と南校舎を繋ぐ“渡り廊下”へと飛び出た。

「しめた！」

小学校に通い続けて早三年。校舎内を把握している里美は、心の中でそう叫んだ。

渡り廊下への両入り口には扉が設置されており、基本は開けたら閉めるようになっている。

先ほどの追いかっこでは扉が閉まっていた。

それが北校舎の扉が開いていたのかは、序盤で早々にバテて犬を見失った掛布が、一時休憩と

して外の風に当たる為に開けて、そのままにしていたという事は誰も知らない真実。

だが、そのお陰で――

「ふっふふ、追い詰めたよ～」

まるでヒーロー戦隊ものに出てくる悪役のようなポジションで、犬の前で立ちはだかる里美。

南校舎への扉は閉まっており、犬は扉を前足で扉を開けるほどの器用さはなかった。

「ふっふふ、さあ覚悟！」

逃げ場が無いにも関わらず、犬の目はまだ諦めていなかった。

犬は迫り来る里美の腕をかわす為に真横へ走り出し、転落防止用の柵の隙間を潜り抜けると、躊躇すること無く飛び降りたのである。

「うそっ！」

思いがけない突然の行動に里美は身体は硬直し、スローモーションのようにゆっくりと展開していく光景。

まるで本当に空を飛んでいるかのようなだった。

だが、七メートルほどの高さから飛び降りた先は中庭であり、クッションや池などといった衝撃を緩和するものは無い。

いくら猫と同じご先祖様を持つ犬でも、無事では済まない。

少し時間は戻り――

「あの犬の野郎。何処に行きやがったんだ？」

掛布は犬を探しに一階へと降り、二階の渡り廊下の真下の辺りから、出入り可能な窓ガラスを開けて、上履きのままで中庭へと出ていたのであった。

「まあ、人間様ならば頭を使わないとな。どうせ犬だ。すぐに学校の外に出てくるはず。この辺りで待ち伏せていれ……うん？」

地面に映る自分の影とは別の影が、段々と大きくなっていく事に気付くも、振り返ることも出来ないまま、ドシンッと重い衝撃が背中を襲い、

「へげっしっ！」

無様な声を上げ、そのまま地面に倒れこんだ。

掛布を押し倒したのは、渡り廊下から飛び降りてきた犬だった。

掛布のノックダウンと同時に、二時限目の終了と中休みの開始を報せる鐘（チャイム）が鳴り響く。

犬は何事もなく歩き出し、中庭の端の方に植えられている紫陽花の茂みへと向かい姿を隠した。その様子を里美は柵に身を乗り出し眺めていた。

犬の無事を確認し、「ほっ」と安堵の胸をなでおろすも、すぐさま里美も中庭へと向かって行く。

ワクワクとドキドキの表情を浮かべて。

◆第五話 犬の名は

中休み――

二時限目と三時限目の間に設けられている十五分間の休み時間。

小学校だけにある休憩時間であり、短い時間にも関わらず、ドッジボールをしにグラウンドへと遊びに行く生徒や教室に残って友達と会話を楽しむ生徒などと、気分転換を存分に味わう貴重な時間である。

しかし、里美のクラス一三年一組一の生徒達は、いつもの休み時間の過ごし方とは違っていた。

中庭にいる里美の元へと、渚や宏子、他に数人のクラスメート達がやってきた。

「里美ちゃん。あの犬は？」

真っ先に宏子が今回の騒動元の所在を訊ねた。

「ほら、あそこにいるよ」

里美が指差した先は紫陽花の茂み。

その茂みの葉っぱの隙間から、チラリと白い物体が見え隠れしていた。

「あんな所に逃げ込んだんだ……」

「ヒロちゃん。凄いんだよ、あの犬。あそこから飛び降りたんだよ」

犬の様子を伺う宏子の肩を叩き、里美は瞳を輝かせながら先ほど自分が居た場所を指差す。

「あそこって……あの渡り廊下から？」

「そうなんだよ。シュバツと飛んでね。鳥のように空を飛んでいるようだったんだよ」

隣に居た渚が話に加わる。

「あんな所から飛び降りたのに、よく無事だったな」

「飛び降りた先に、なぜか掛布がいてね。掛布が下敷きになったのが良かったかも」

「ああ。それで掛布が、あそこで寝ていたのか……」

ここに来る途中、中庭の出入り口付近で地面に伏していた掛布がいたことを思い返す。その姿はボロ雑巾みたいだった。

「気付いていたのなら起してくれよ」

ボロ雑巾……ではなく、掛布が背後霊みたく渚の肩に寄り掛かってきた。

「で、あの糞犬は何処だ？」

ワザとらしく辺りを見回し、犬を探す掛布。

そして、茂みの奥でふてぶてしく寝ている犬を見つける。

「よーし、そこでジッとしてろよ！ 今、ぶん殴ってやる！」

半袖の袖を無意味に腕まくりをして、茂みに分け入ろうとすると渚が呼び止める。

「犬を殴ったら警察に捕まるぜ、掛布」

「あん、なんで犬を殴ったら捕まるんだよ？」

「知らないのか？ 動物を殴ったり傷つけたりすると罪になるんだよ」

渚の豆知識に「えっ！ マジで？」と驚く掛布。

「あ、なんかテレビのニュースで見たことがある。なんだったかな……」

宏子は心当たりがあるようで、必死に思い出そうとしていると、渚が答えを述べる。

「動物愛護法ってやつだよ。ついこの間、野良猫に酷いことをして捕まったというニュースでやっていたよ」

「あ、そうそう。それ」

宏子も同じニュースを見ていたようで相槌を打つ。

「ま、まあ警察にバレなきゃ、捕まらないだろう」

冷や汗をかきつつ堂々と人前で犯行予告を語る掛布に対して、里美は呆れながら、

「もし掛布が、あの犬を殴ったら、私達がすぐに警察に言うからね」

掛布以外、この場にいる全員が賛同する。

「な、なんだよオマエら。犬と俺、どっちの味方なんだよ？」

「そんなの犬の味方に決まっているでしょう」

またしても、全員の賛同の声があがる。

「キ～～！」

悔しい顔を浮かべ、大雑把に地団駄を踏む掛布。

そんな掛布はほっといて、里美たちは犬について語り出す。

「やっぱり、首輪とか付いてないから野良犬だよな」

「家とかが無いということになるよな」

「雨が振ったら、びしょ濡れになっちゃうよね……」

犬への好奇心は、哀れみへと変わっていく。

皆の気持ちは犬に届いていないのか、大きな欠伸で返した。

「もし野良犬だったら、このままだったら“保険所”に連れていかれるよな……」

渚が何気なく発した言葉に、里美が食いつく。

「保健所って？」

「保健所ってのは、簡単に言えば僕たち、人の健康とかを管理、検査する所だよ」

「病院とは違うの？」

「うーん。病院と比べると……病院よりランクが上じゃないかな。確か保健所って、国が管理してるとかだったような」

突然の質問に、そこら辺はあやふやだったらしく自信無く答えたが、それでも人面犬や動物愛護法などを知っていた、物知りな渚に一同は納得する。

「その保健所に、なんで犬が連れて行かれるの？」

里美が本題に戻す。

「なんでも野良犬には狂犬病とかいう病気を持っていたりして、噛まれたらその病気が移るから危ないから捕まえるんだって……で、その後は、処分されるんだよ」

渚の物騒な言葉に、里美は思い当たる言葉で訳す。

「処分……殺しちゃうということ？」

静かに頷く渚。

――保健所の役目は、インフルエンザや結核といった病気の対策、食中毒の検査といったものから、水質・土壌検査などの公害対策など、いわゆる対人・対物に対しての様々な保険活動を行っている。

その数ある保険活動の一つに、犬や猫等の動物の殺処分などが行われているのである。年間、犬は約二十万匹、猫も同数程度の数が処分されている。

しかし、動物愛護が叫ばれる昨今では、引き取り先の募集を積極的に行っており、年が経つにつれ処分される数は減ってきてはいるのだが、未だその数はゼロでは無い――

「え～、なにそれ！ それじゃ、保健所に連れて行かれたら、あの犬……」

納得のいかない現実に気落ちしてしまう里美たち。

「ふん、保健所に連れて行ってしまえ！」

掛布が悪口をたたくものの、里美や渚たちが一斉に睨み付けて黙らせる。

「この犬、ここで飼っちゃダメかな？」

宏子がそう呟くと、

「そうだ！ だったら、学校で飼ったらどうかな？」

里美たちもその意見に乗っかり、アイデアを足していく。

「飼育係みたいに皆で世話してさあ。順番に散歩とかするの」

「それ、良いかも！」

「エサは給食の残りをあげればいいんじゃない？」

「ああ。必ず給食は残るから、犬に食べて貰えばエコだよな」

里美たちの中では、この犬を飼うことは決定事項となった。
飼うと決めたのなら、一番重要な事を決めなければならない。

「それじゃ、まずは名前を決めないとな」

「名前か……。やっぱり、シロとか」

「いくら白い犬だからって、シロというのはつまらないな。ここはカッコイイ名前をだな……アレックスなんてどうだ？」

「犬といたら、ラッシーだろう。常識的に考えて」

「ウンコバカアホ太郎」

「ペ、ペペは、どうかな？」

「チロルはどうか？ 可愛いと思うけど……」

皆が皆、思い思いに考えた名前を口にして出し合う。

「里美ちゃんはどんな名前が良いと思う？」

先ほどの算数の計算問題と同等に、腕を組み悩み考えている里美に宏子が声をかける。

「ん～～～～」と唸った後、良い名前を思いついたのか、ポンっと手を打つ。

「ハチ、かな」

「ハチ？」

宏子の頭の中に昆虫の“蜂”を思い浮かんだ。

「どうして犬に蜂なのか？」と内心思ったが、すぐさま里美は宏子に、

「ほら、テレビのCMで外国人が犬に“ハチー”って、呼んでいるじゃない」

“ハチ”の部分のみ、そのCMの外国人の声真似をしてみせる。

「ああ。あの映画のCMだね」

里美が言うCMに見覚えと聞き覚えがあり、宏子はハチという名前に納得する。

犬の名前が一通り出揃ったが、各自名付け親になりたいのか、自分の考えた名前を譲らず、どれにするかは決まらなかった。

段々と険悪な雰囲気となり、新たな紛争の種になり始めるのを見越して、渚がある解決策を提案する。

「だ、だったら、皆の名前を全部付けたらどうかな？」

ゆとりある時代となり、時代は無用な面倒事や無駄なものを極力無くすようになりました。

それは学校教育にも出てくるもので、取り合いなどの揉め事を起さないために“平等方針”を持ち込んできました。

その方針の最たる例は、学芸会での配役。

主役であれ脇役であれ、生徒が望む役があれば、立候補者全員が同じ役をやる事が出来るのである。

里美たちは去年の学芸会では「桃太郎」を演じたのだが、桃太郎が七人もいるということになったのだ。

まさに茶番劇であっただろう。

こういった平等方針を取っている小学校は、里美の小学校の他にも多々あるようだ。

「また平等ってやつか。俺、あれは好きじゃないんだよな」

掛布は、その制度に気に食わない様子だった。

そんな皆の輪から外れている掛布の方を振り返り、里美が言葉を投げかけた。

「やりたい役をやれなかったら、一番文句を言いそうだけどな……」

「そりゃそうだろう。それに主役はたった一人だから目立つんだから。まあ、だけど。その代わり俺の木の役とかが目立ったんだけどな」

掛布は、皆がやりたがらない役を率先としてやり、何役もやることになった。

だが、掛布が出る度に拍手と笑いが響き、ある意味主役として活躍していたようだったのである。

「掛布は、ほっといてさあ。皆の名前を全部付けた方が良くもね」

と、里美が話しの筋を戻し、渚がまとめた。

里美たちが出し合った犬の名前は、次の通り。

アレックス。

シロ。

ラッシー。

ペペ。

ハチ。

ヒーロー。

ラック。

チロル。

「ということは、アレックス、シロ、ラッシーペペ、ハチヒーローラック、チロル……」

「おい！ 俺が付けた名前が入ってないぞ！」

掛布が叫ぶも、里美たちは以心伝心で無視をする。

「長いし、覚え難いし、言い難いな……」

有り体の感想を述べると、みんなは頷く。

「アレッ…シロラッシー……ロック？ ラック？」

「アレロックスシチロールペペ……？」

「シチロールって、なんだよ？」

自分が付けた名前はハッキリ覚えているもの、他人が付けた名前は愛着が無い分覚え難いもので、言葉につまづき、新しい名前が生まれた。

「もう略して、アレックスで良いだろう」

「それじゃダメだよ。やっぱり、全部の名前を言わないと！」

「もっと覚え易く言い易くするために、並び替えたりしないとダメだな」

ということで、

「アレックス、ラッシー……ペペハチ、ラックシロ、ヒーローチロル」

「アレックス、チロルラッシー、ハチシロ。ペペヒーロー……」

里美たちは言いやすく覚えやすいように、犬の名前を組み替えては述べ続ける。

「おい、俺のラックが抜けていたぞ」

「アレックスは何度も言って覚えたから、最後にしても良いんじゃない？」

「それじゃ、シロロッキー、ペペ、ハチ、ラックアレックス……」

試行錯誤を繰り返し、ある方向性が見えてきた。

覚え難い名前を先頭に持っていき、中間に語呂の良い名前を組み合わせ、最後に短い名前をまとめて、勢いで言うことにした。

「ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロル！」

「ラッシーはラックでヒーローアレックスのハチペペシロ、チロル！」

「え、えっと……ラッシーラックヒーローアレックス、ハチペペシロチロル！」

「うんこうんこ臭いアホゲロまみれのとつとこバカタロー」

「うんこ……掛布、うるさい！ えっと……」

「ラッシーラックヒーローアレックスハチペペシロチロル！」

なにやらお経のような呪文のような。

それでも、やっとみんなが、一通り犬の名前を覚え言えるようになった頃には、中休みの終了を報せるチャイムが鳴り響いた。

「あ、次の授業が始まる。急いで戻らないと」

犬の名前付けに時間はあっという間に過ぎ去り、渚たちは教室へと戻ろうとする。

「それじゃ、給食の残りを持ってきてあげるから、そこでじっと待っていてね。え〜と、ラッシーラックスハチペペシロル！」

「ちょっと違うよ、里美ちゃん。ラッシーラックヒーローアレックスハチペペシロチロルだよ」

宏子が指摘する。

「え、ちゃんと言えてたでしょう。ラッシーラックヒーローハチペペチロルでしょう？」

「また、なんか違っていたよ」

「えー！ 嘘？ どこ？」

宏子と里美が間違いの言い直しをしていると、

「おーい、急がないと遅れるぞ！」

すでに入入り口付近まで移動している渚が呼びかけると、里美たちも慌てて駆け出した。

その様子を、渡り廊下から眺めている“生徒”が居たことに、教室へと急ぐ里美たちは気づいていなかった。

そして、犬……ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロルは、大きな欠伸をかき、体を丸めて寝に入った。

昼休み――

給食時間が終わり、中休みと同様にグラウンドへと向かう生徒や教室に残る生徒。

そして里美たち含む中休みで中庭にいたメンバーは、給食の残り……といっても、あえて残した残り物を持って、中庭へとやってきた。

先ほどの紫陽花の茂みに真っ直ぐ向かい、

「あ、居た居た！」

ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロルが居ることを確認する。

「ほら、餌を持ってきたよ！ 我慢したんだからね」

里美は原型から半分の長さになってしまった黒砂糖パンを差し出す。

黒砂糖パンは、里美の好物の一つで、本来なら残さず食べきるのは当然として、余っていたらおかわりをするほどであった。

それを半分も残して、ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロルにあげるのだから、本当に我慢したのだろう。

黒砂糖パンを持つ手が震えていた。

ただし、里美分の黒砂糖パンはしっかり里美の胃袋に入っている。

ラッシーラック・ヒーロー……略して“犬”にあげた分は、宏子が残した黒砂糖パンであった。

里美はその黒砂糖パンを手にとって振っていると、犬は体を起し、警戒すること無く茂みから、すんなりと出てきた。

そして、里美の手に持つ黒砂糖パンにかぶりついた。

「おおー！」

腹が減っていたのか、ガツガツと豪快に食べる姿を見て、里美たちは声をあげる。

「牛乳も飲むかな？」

渚が牛乳パックを取り出し、ストローをパックの飲み口穴に突き差して穴を開通する。

「ストローで吸えないだろう」

渚の隣にいる生徒が笑いながら忠告を入れてくれる。

「お皿とかないの？」

牛乳を入れるための皿を求めた。だが、残念ながら誰も持っていなかった。

給食置き場に行って、食器を奪取して来ようとしたが、

「大丈夫だよ。こうすれば……」

渚は、差したストローを取ると、牛乳パックを強く押し込み、犬の口に目掛けて牛乳を噴射させた。

勿体無いほどに牛乳を地面へと溢してしまっているが、それでも犬は多少なりとも必死に牛乳を飲んでいるようだった。

溢れた牛乳は、後ほどスタッフが美味しく頂いたことは、説明する必要もない。

そんな食事光景に、里美たちに笑いが溢れる。

犬がパンを食べ終わったら遊びに行こうと思っていた矢先、里美たちの学級委員長に連れられて、白髪雑じりの初老の男性がやってきた。

中休み、渡り廊下で里美たちを見ていた……監視していた生徒は、委員長である平原愛だった。

それについては、里美たちは知る術も無い。そして、

「誰だ、あれ？」

掛布が委員長の隣にいる見慣れぬ人物に対して疑問の声をあげる。

「それ……マジで言っている？ 校長先生だよ」

渚は呆れながら初老の男性が何者なのかを説明すると、掛布は思い出したのか「ああっ！」と声をあげる。

なぜ、委員長と校長先生がここにやって来たのか？

その理由は、何となく予測できていた。

「なるほど。あれが、噂の迷い犬ですか」

校長先生が来た理由は、やはり犬だった。

「そうです。えっと……ラッシー・ヒーローアレックス・ハチペペチロルです」

里美が明るく答えるも、すぐに宏子が「ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロルだよ、里美ちゃん」と矯正する。

「おや、もう名前も付けているのかい？」

校長先生は優しく笑う。

「校長先生。この犬を学校で飼ってもいいですよね？」

里美たちの嘆願に、校長先生の表情が曇った。
それは難色を示すという顔だった。

「大変申し訳ないが、学校でその犬は飼えないな」

「え～～！」

校長先生の当然の言葉に里美たちは一斉に非難の声をあげ、相手が校長先生にも関わらず責め立てる。

「どうしてですか！」

「ウサギとか鶏とかは飼っているのに、犬はダメなんですか？」

「校長先生が正しいぞ！」

「私たちがちゃんと世話しますから、犬の一匹ぐらいいいじゃないですか！」

校長先生の立場的の本音としては、厳しい態度を示し、今すぐ犬を学校から追い出したいのだが……。

生徒たちの気持ちを尊重せず、頭ごなしに行動をするのは、生徒たちの心に傷を付けるかも知れないという考えが働く。

「まあまあ。君たちの気持ちは解からなくもない……。ただ、ここは動物園ではなく学校。君達に勉強やこういった社会のルールを教える所でもある」

出来る限り優しく述べるも、

「で、でも、私たちが飼わなかったら、ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペシロチロルは保健所に連れていかれるんですよね……」

宏子は泣きそうな顔で、校長先生に訴えかける。

「それは……」

長い犬の名前はよく言えるな、という感心はさて置いて、保健所のことを知っていることに感

心するも、野良犬を学校で飼うということは感心できないものだった。

そして少し厳しい目つきになり、

「君たちが、あの犬に噛まれていないから、まだよしとしますが、あの犬は狂犬病とか病気を持っているかも知れない。また、君たちは良くて、他の生徒……特に一年生や二年生の低学年の生徒達が噛まれたりと、問題が発生するかも知れません。まあ、その犬が元で授業が中断したという、問題が既に発生しているようですからね」

校長先生の言い分に、里美たちは押し黙るしかなかった。

意気消沈する生徒たちに校長先生は、ある一つの解決策を提示する。

「立場上、私が言えることは“学校”では飼ってはダメだということ。学校で飼うことはダメだが、誰か君たちの家で飼える人はいないのかね？」

里美たちは、お互いの顔を見合わせ、

「ん〜どうだろう。うち、猫を飼っているし」

「うちのお母さん……、めっちゃ犬嫌いだしな……」

「私のところはマンションだから、動物を飼うのは禁止なんです」

もし誰かの家で飼えることが解かっているのなら、学校で飼おうという話が出る訳が無い。里美も宏子に一応訊いてみる。

「ヒロちゃんの所は？」

「うちは……。お母さんが動物アレルギーで、犬とか猫は飼っちゃダメなの」

「そうか……」

「里美ちゃんの所は？」

「ママに訊いてみないと解からないかな」

「そうだよね……。そうだ。校長先生の所は、どうですか？」

宏子は、自分たちの話し合う様子を眺めていた校長先生に訊いてみた。

「残念だが、ウチのカミサンは二宮先生と同じで犬が大の苦手だね……」

答えは里美たちと同じようなものだった。

「そうだ委員長の所は？」

渚は、みんなと距離を取っている校長先生を連れてきて役目を終えていた委員長にも話を振る。

「わ、私の所は、お母さんとかに聞いてみないと……。でも、間違いなくダメだと思う……」

などと即断で「飼える」という人は居なかった。

「とにかく、まずは君たちの親御さんに訊いてみないといけないみたいですね。それと学校では犬を預かれないから、今日は誰かの家に連れていきません。それと、今回の件は不問としますが、もしまた犬を連れてきたら、その時は問答無用で対処するので気を付けるように」

静かな口調ながらも校長である貫禄めいたオーラで威圧すると、後は里美たちに任せ、その場を後にした。

渚が中心となり、話を整理する。

「とりあえず、この中でラッシーロック・ヒーローアレックス・シルチロルを飼ってもいいか説得できる人が、連れて帰った方がいいかな」

「そうだね」

「だったら、ラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロルを飼える人が、正式の名前を付けられるってしないか？ やっぱり名前が長いのはあれだしな」

揉めないように、みんなの名前を付けたものの、今も所々名前を間違っている結果を元に、やっぱり短い方が良くことに気付く。

「やっぱり、ウンコバカアホ太郎にしとけば良かったんだよ」

掛布の発言は当然のように無視されて、掛布の周りだけに木枯しが吹きぬける。

「そうだよね。そのぐらいの権利は有っても良いよね」

「それじゃ。今日、ラッシーアレックス・ハチペペシロチロルを預かる人を決めないとな。今日、預かる人が付けた名前をラッシーラックうんたらの、ひとまずの正式の名前にしよう？」

『賛成』と、一同に声が上がる。

「それじゃ、預かるのは誰にする？」

「はいはい！」

真っ先に手を上げたのは、里美だった。

激しい追いかけっこをして汗を流した里美と犬。犬の里美の中で友情が芽生えたのだろうか、是非とも飼いたいと思うようになっていた。

「それじゃ、今日は藤井がラッシーラック・ヒーローアレックス・ハチペペシロチロル……藤井が付けた名前は何だったけ？」

「ハチだよ！ まかせておいて。なんとか、お母さんを説得して飼うようにするからね！」

里美たちの気持ちをよそに、当事者である犬“ハチ”は、自分に関係無いことのように再び欠伸をしたのであった。

◆第六話 ここ掘れワンワン？

時は過ぎ、帰りのホームルームの時間。

各自ランドセルを机の上に置き、帰る準備は整っていた。

今日は犬が乱入したりで、いつもよりも騒がしい一日だった。

その為か、二宮先生はいつも以上に疲れているようで、生気の無い顔をしている。

「犬は絶対に、絶対に連れてこないように。そして、犬が迷い込んできても追いかけないように……以上……」

言葉少なげに注意ごとをサラッと述べて、帰りのホームルームは早々に終わってしまった。

里美たちは、すぐに席を立ち中庭へと向かうと、ハチは里美たちを待っていたかのようで、中庭の中央に植えられている桜の木の下で座っていた。

「さあ、ハチ。一緒に帰ろう？」

里美が呼びかけるとハチは起き上がり、里美の下へと歩み寄ってきた。

一緒に追いかけてこしたり、餌をあげたりしたお陰なのか、里美たちへの警戒心が薄れたのか、里美がハチと出会った朝一歩近づこうとしたら、一歩離れられた一比べて、距離は随分縮まっているようだった。

里美はハチを連れて、いつものように渚と宏子、他数名と一緒に学校を出る。そのグループから少し離れて、電柱柱に身を隠しながら後を追う、掛布の姿があった。

「クソー。あのウンコバカアホ太郎め……絶対に許さないからな」

掛布はいまだ、手に“しっこ”をかけられた恨みは忘れておらず、仕返しをするチャンスを伺っていた。

「掛布くん……こっちの方角じゃないよね」

後を付いてくる掛布に気付いた宏子はそのことを里美に教えるが、「そんなヤツ、ほっとこう」と手で払う仕草を取る。

さて里美は、朝来た道とは別のルートを通っていた。

帰宅途中で、みんなと遊ぶことは日課となっていた。校則では学校が終わってから、まずは真っ直ぐ家に帰ってランドセルを置いてからではないと、友達と遊んだり、何処かに遊びに行ったりしては駄目なのだが、それはそれとして、一分一秒でも遊んでいたい小学生にとって、一度家に帰ってから、またみんなと会うというのは時間の無駄なのだ。

だからこうして、一緒に帰宅している時に、一緒に遊ぶのである。

今回は、ハチも居るということなので、誰かの家に遊びに行くのは辞めて、近くの公園で遊ぶことにした。

住宅街の中にあり、町民の憩いの場となっている若草公園。

ジャングルジムやブランコなどお馴染みの遊具などが設置されており、サッカーが出来るほど広い広場も有する公園だ。

周りには桜の木が植えられており、今年の四月は花見をする人たちで溢れていた。

里美たちは、ランドセルや補助カバンなどをベンチに集めて置き、何をして遊ぼうかと話し合いを始めた。

「何して遊ぶ？」

「鬼ごっこかかくれんぼうかな？」

「えー！ 今どき、鬼ごっこかかくれんぼうって」

小学三年生にもなれば、鬼ごっこなどは幼稚染みた遊びと感じるようになっていた。だが、サッカーボールとか遊び道具が無いので、選択肢は限られる。

すると渚が、近くに落ちていた木の棒（桜の枝）を拾って持ってきた。

「これを投げて、ハチが拾ってくるかな？」

「あー、あれね！」

里美が声をあげる。

頭の中で投げた木の棒をハチがくわえて持って帰ってくるシーンを思い描く。

「私、あれに憧れていたんだよね」

「それじゃ、それー！ ハチ、取ってこい！」

渚は遠くへ、木の棒を放り投げる。

しかし、ハチは『なぜ、そんなことをしないといけない？』といった感じの表情を浮かべ、後ろ左足をあげて耳をかくだけだった。

「まあ……、訓練しないとダメみたいだね」

里美のイメージ通りには行かず、憧れは脆くも崩れて肩を落とすと、みんなの笑い声があがる。

「しょうがないか……よし」

里美は気持ちを切り替えて、

「掛布、捕ってこい！」

と、大きな声で叫ぶと、桜の木の後ろに隠れていた掛布が飛び出した。

そして「ウォ〜ん」と犬の鳴き真似をしながら、投げ捨てられた棒へと一目散へと駆け寄り棒を拾うと、里美の下へと持って帰って来た。

「って、何をやらしとんじゃ！」

せっかく拾ってきた木の棒を、地面に叩きつけた。

掛布のノリツッコミに、一同は大笑い。

「なに、さっきからコソコソしているのよ。一緒に遊びたかったら、一緒に遊んであげても良いよ」

「うるへー！ 誰がお前達なんかと遊ぶかよ」

里美の誘いに、掛布は憎まれ口で突っ返す。

「あっそ。だったら、向こうで一人で遊んでなよ」

「フンッ、お前に言われなくても、そうするよーだ！」

人差し指で下まぶたを引き下げ、舌を出し、アッカンペー。そして、背中を向けて立ち去っていた。そんな掛布と入れ替わりに渚が、今度は空き缶を拾ってやってきた。

「みんな、これで缶蹴りでもしようよ」

「賛成一！」

渚を先頭にして一同は、広場エリアへと移動する。

「ほら、ハチも行こう。そこにいると、掛布に何かされるよ」

ハチは里美の言うことに素直に従い、里美の後を付いていった。
そして、一人残された掛布。

「くそ～。あの犬といい、藤井里美もバカにしゃがって～」

ふとベンチに積み重ねているランドセルの山に目が止まる。

「犬の責任は、飼い主の責任だよな」

ニヤッと嫌らしく笑い、掛布の悪戯心に火が点いた。

日が傾き、夕暮れ時。

カラスが「カー、カー」と鳴き、里美たちの影が細長く伸びていた。

「ズルイよ、里美ちゃん。まさか、ダンボールの中に隠れているなんて……」

「へへっ。だけど、ハチが鳴かなかったら、まだ見つけれられていないと思うよ」

里美は、ドヤ顔を浮かべ宏子を見る。

遊びは、缶蹴り、鬼ごっこ、そしてかくれんぼうと移行していった。そのかくれんぼうをしていた時に、里美は茂みに捨てられているダンボールを見つける。きっと、誰かがお花見をしたときにゴザ代わりにしたのを、そのまま放置していったのだろう。

里美はそれを箱状に戻し、その中にハチと入って隠れていたのだ。絶対に見つけられないとタカをくくっていたが、ハチが“ワンっ”と、吠えたために見つけられてしまったのだ。

「でっ、藤井が鬼になったらなったで、あっという間に見つけて、捕まえるんだからな」

汗と土埃まみれになり、疲れ果てている渚が言葉を漏らす。

ハチと互角の追いかけっこを演じた運動能力を武器に、走り逃げる渚たちをあっという間に追いついてはタッチする。

それは役目通りに鬼のような強さだった。

「そういえば、掛布のやつは？」

途中から姿が見えなくなっていた人物を訊ねたが、

「帰ったんじゃないの？」

居なくなったことに、誰も特に気にすることはなく、ご存知無かった。

「それじゃ、俺たちも帰ろうか。そろそろ遅くなるし」

「そうだね」

里美たち一同は、ランドセルを置いているベンチへと向かう。ベンチに着くや否や、里美が「あれっ？ あれあれあれ？」と、素っ頓狂な声をあげる。

「どうしたの？ 里美ちゃん」

「私の補助カバンがないの……」

「え？ だって、ここに……あっ！」

宏子のランドセルの隣に置かれていた里美の補助カバンの代わりに、教科書や筆箱が置かれていた。その教科書類は里美のものだった。

「どうして、ここに……はっ！」

里美たちは、こんなことを仕出かす人物の名を思い浮べ、一同声を揃えて、その名を口に出す。

『掛布かあ……』

誰一人、掛布の犯行を目撃した訳では無いが、日頃の行いと性格で掛布の仕業であると断定したのであった。

「たくっ、こういうしょうもないことをやるのは、アイツしかいないよね。掛布は明日、ぶっ叩くとして……」

無くなった……というより、何処かに隠されたであろう補助カバンを探さなければならない。

「あ、私も探すよ」

「ヒロちゃん、ありがとう」

みんなで探せば、すぐに見つかるだろうと、渚たちも探すのを手伝ってくれた。

里美の補助カバンは、お気に入りの補助カバンなので、なんとしてでも見つけなければならない。

しかし、ゴミ箱の中や公園の端に建てられている公衆トイレの中とか色んな所を探したが、補助カバンを見つけられなかった。

「もう、何処に隠したのよ！」

補助カバンは、それなりに大きさと、カラフルでスタイリッシュなので目に付き易い。だから隠す場所は限られてくるのだが、これだけ探しても見つからないということは……。

「まさか掛布のヤツ、持って帰ったんじゃないか……」

渚の不吉な言葉が里美に聞こえてしまい、公園の外灯に明かりが点るように、里美の心に怒りの炎が点る。

「ねえ、渚くん。そういう時はドロボーで警察に突き出して良いんだよね？」

「まあ、まあね……。この場合は、窃盗罪になるから……」

辺りは暗くなり始め、探すのを諦める雰囲気は漂い始めた。

掛布への怒りは悔しさとなって、思わず泣きたくなりそうになる。その時だった――

ハチがクンクンと地面をかき始め、一本の桜の木に向かって吠え出した。

突然の行為に何事だと、里美たちはハチに視線を向ける。

吠える姿が、民話の“花咲かじいさん”のあるワンシーンが思い浮かぶ。

「ここ掘れ、ワンワン？」

「そこを掘れば、大判小判がザックザックっ？」

「もしかして、そこにカバンを埋めたのかな？」

しかし地面には、掘ったような跡は無い。

みんなが地面を見ている中、宏子がふと見上げると、

「あっ！ あれっ！」

辺り薄暗くなっているため良く見えなかったが、外灯の明かりで辛うじて里美の補助カバンが、木の枝にかけぶら下がっていた。

「あんな所に……」

灯台下暗しとは、まさにこういうことを言うのだろう。

だが里美にとっては、そんなことよりも人様のお気に入り補助カバンを放り投げて、木の枝に引っ掛けるという、粗雑に扱われたことに腹立つ気持ちが高まる。

明日、掛布への処罰は一発どころでは済ませないと、硬く心に決めた里美だった。

「やっぱり、犬の嗅覚って凄いんだね」

宏子がハチの方を見て感想を述べると、渚がそれに応対する。

「災害救助犬は、地震とかで瓦礫の下敷きになっている人とかの匂いで見つけるとか言うしね」

さて、補助カバンを見つけることは出来たが、次なる問題にぶつかる。

「しかし……あれ。どうやって、取ろうか……」

目測で、五メートルほどだろうか。運動神経抜群の里美がジャンプをしたとしても、到底届かない高さだ。

「長い棒とかが、あればいいんだけど……」

市が管理する公園。

危険なものをそこらに放置している訳が無い。公園の隅々まで遊び回っていたが、そういったものは見かけなかった。

有ったのは、空き缶やダンボール、小枝ぐらいだった。

どうやって取ろうかと、相談し合う。

「石で、ぶつけて落とすか？」

と、提案すれば、

「ダメ！」

里美が拒否をする。

お気に入りの補助カバンを、石にぶつけられるのは心境に良くないものだ。

しかし、だからと言って突風が吹いて、カバンを吹き落としてくれるのを待つ訳にはいかない

。

「だったら、あそこまで登るしかないかな？」

登るといっても、補助カバンが引っかかっている枝は細く、あそこへ到達する前に枝が折れて、カバン共々に落下してしまう恐れがあり、とても危険だ。

あーだ、こーだと相談している最中に、ハチが木をかけ登っていった。

「えっ！」

驚く間にスルスルと補助カバンが引っかかっている枝の元へと登っていく。
そして、ハチの重さで枝がしなり、

――バキッ――

乾いた音が響き、補助カバンとハチが重力の法則に従って落ちてくる。

その光景はスローモーションのように、ゆっくりと落下してくるよう感じた。
里美は咄嗟に両腕を出すと、お気に入りの補助カバンではなく、ハチを受け止めた。

しかし落下衝撃と重さに耐えかね、里美は地面に倒れ込んで尻餅を打ったが、ハチを無事に救助した。

「ウワー！ スッゲー！」

周りにいた渚たちは言葉にならない声をあげ、

「さ、里美ちゃん、大丈夫？」

里美の下へ駆け寄ってくる。

「う、うん。なんとかね……。ハチも大丈夫？」

「ワンっ！」

里美の両腕に抱えられたハチは、元気良く吠えて返事した。

「犬って、木に登れるんだ！」

ハチが披露した軽快な木登り。

そして、補助カバンを落としてきたことに、みんなは大興奮だった。

「**だけど、ハチもスゴイけど。藤井も、よく受け止めたな**」

あの瞬間、唯一動いたのは里美だった。

里美とハチの抜群のコンビネーションに賛辞を送り、里美は照れ笑いを浮かべ、人差し指で頬をかいた。

「やっぱり、ペットって飼い主に似るんだね」

「**まだ、飼ってないけどね**」

渚は補助カバンを拾い上げ、里美に手渡す。

里美は渚に礼を言い、そして本当に礼を言わなければならない相手にも、ちゃんと礼を述べた。

「ありがとうね。ハチ！」

「わんっ」

里美は、ハチをギュッと強く抱きしめる。

里美の中でハチを飼うことは、より確かな決定事項となっていた。

◆第七話 母と父

「ダメです」

里美は意気揚々と家に帰ると否や、ハチを抱きかかえ、スーパーマーケットでお菓子を買ってとおねだりするのと同じように「飼っていい？」と訊いたが、**母親**のたった一言で拒絶されたのである。

里美の母親一莉奈一は、里美よりも少し髪が短いショートボブで凛とした瞳、一目で里美と親子なのだと判断できる容姿をしている。

実年齢よりも若く見られることが自慢だが、最近はお腹周りが気になっていて、なんとかしないと考えてはいた。

「どうして、飼っちゃダメなの！」

里美の家は中古であるものの一軒家である。
動物を飼えないという縛りは無いのだが……。

「犬を飼ったら面倒で、ご近所さんの迷惑になるだけでしょう」

「ハチは、面白い犬で凄い犬なんだよ！」

既に犬に名前が付けられていることに、ため息を吐く莉奈。

「面白い？ 凄い？ どこが？」

どこからどう見ても、普通の白い犬にしか見えない。

「ハチはね、渡り廊下から飛んだり、木を登って私のカバンを取ってきてくれたんだよ」

我が娘ながら「なに言っているのかしら？」と、莉奈は首を傾げる。

「ちゃんと世話するから。ねっ！」

「ちゃんと世話をするとっても、どうせ最初の内だけでしょう。そして面倒になって、飼わ

なきや良かったって後悔するでしょうに」

「後悔なんかしないから！ 絶対に最後まで世話をするから！ 飼ってもいいでしょう！」

「ダメです！」

里美が必死に嘆願しても“聞く耳持たず”だった。

「うちには、もう犬がいるんだから、それでいいでしょう」

「え？」

藤井家の家族構成は、父と母、里美の三人家族。まだ、ハチは含まれていないはず。

「犬なんて、まだ飼っていないじゃん」

「パパのことよ」

「えっ！ パパって……犬だったの？」

突然の告白に里美は困惑しつつ、父親の姿を思い浮かべた。

父親は、二本足の直立歩行が可能な人間の姿をしている。ヒゲは生えたりするが、犬耳や尻尾は生えてはいない。

「犬みたいじゃない、うちのパパ。ゴロゴロしたり、ご飯を食べている時なんて、まさに犬そのものでしょう」

その光景を思い浮かべたが、父親は父親だった。

「それにパパは成年生まれだからね。パパで我慢しなさい」

パパ＝犬と成す情報を与えてくれたが、

「それは……無理やりだよ、ママ……」

流石の里美も呆れた顔で返した。

「とにかく、ダメなものはダメなの！」

「ヤダヤダ！ この犬が良いの！ ハチが良いの！」

頑なな莉奈に里美は、今にも泣きそうに涙目を浮かべて、もはや最終奥義“駄々”をこねるしかなかった。

「いい加減にしないで！ ウチでは飼えないの！ さっさとその犬を捨ててきなさい。捨ててくるまで、ご飯抜きよ！」

里美の瞳に涙が溢れる。

「もしウチで飼えなかったら、ハチ……保健所に連れていかれるんだよ！」

「ある意味。その犬にとって、そっちの方が幸せかも知れないわよ」

涙目の嘆願も効果は無く、莉奈はそっぽを向いて冷たく言い放った。

里美は聞く耳を持たない莉奈の耳に届くように、息を大きく吸い、渾身の力を引き出し、己の限界を超える大声で、

「「「ママのヴああ力あああああ————————！！」」」

その怒鳴り声は、家が揺れ、近所にも聞こえ、莉奈の耳の鼓膜が破れかけるほどの威力だった。

そして里美は、ハチを連れて家を飛び出した。

「ママのバカ！ 分からずや！ デブ！ 短気！」

自分の母親に対しての罵詈雑言を口にしながら、道を歩く里美。

そしてハチは、大人しく里美の隣を歩いていた。

母の文句は一旦止め、これからどうしようかと画策した。

「ヒロちゃんの家にお邪魔しようかな……。あ、でも。ヒロちゃんのお母さん、動物アレルギーとか言っていたよね……。ハチを連れていくのは、ダメだよね……」

頼りになる友の家に行くことはできず、足取りはより重くなる。

「ママのバカ！ アホ！ 冷血女！ ママが保健所に行っちゃえばいいのに……」

再び母親の罵詈雑言を口にしつつ、何処に行く当ても無く歩き続ける。

ハチは、ただ黙って里美の隣を歩いていた。

「くっしゅん！」

その頃、くしゃみをした莉奈一母親一は、鼻をすすっていた。

「たくっ、犬を拾ってくるなんて、誰に似たのかしら……」

晩御飯の準備を終えて、居間で夕方のニュースを見ていた。

窓の外は完全に日は落ち、真っ暗になっていた。

小学三年生と言えども、こんな時間に外に出させたのは失敗だったかなと、感情に任せて言ってしまったことに反省していた。

迎えに行こうかなと思い、立ち上がると、

『犬の散歩でお手軽ダイエット！』

テレビから聴こえてきたナレーションにピクッと反応し、そのままテレビに目を向けた。

『ですから、犬の散歩をするだけで脂肪を燃焼させる有酸素運動となります。それにワンちゃんがいますと、散歩をしなければならないという“義務”が生じますので、否応が無く運動することになります』

『そうですね。専業主婦の方は、家でゴロゴロしがちになりますから、犬を飼うことで運動不足を解消しますよね』

『犬を飼っている知り合いで、体が太めの方はいません』

コメンテーターと専門家との会話中に、テレビ画面の下部に“効果は個人により差が出ます”とい

うテロップが入る。

「そういえば、犬を飼っている新井さんの所は、子供が三人いるのにスタイルは良いわよね」

莉奈は服を捲し上げ、お腹周りに付いた脂肪をプニつつねった。

「何をしてるんだ？」

意識外からの呼びかけに莉奈は「あわわっ！」と吃驚して、心臓をバクバクさせながら背後を振り返った。

「あ、あら、アナタ。いつ帰ってきてたの？ 　というか今日も早いのね」

そこにはネクタイをほどく、戌年生まれの里美の父親一郎一が立っていた。

莉奈よりも二歳年下ではあるが、壮年期の中頃でもあり、朗の顔に仕事疲れが滲んでいるのか、朗の方が年上に見られてしまうのである。

「ただいま。最近不景気だからな、外注が少なくなって仕事が減っているんだよ。たく、何が政権交代が最大の景気回復策だよ。一向に良くなりはしない……あれ、里美は？ 　部屋か？」

いつもだったら、真っ先に「お帰り」と出迎えてくれる愛娘の姿が無いことに気付いた。

「ああ、里美だったら……」

莉奈は、簡単に事情を話す。

「へー、犬をね。まあ子供なら誰もが通る道だな、動物を拾ってくるのは。俺も小学生の時に拾ってきたからな。まあ、俺の場合は猫だったけど」

「アナタに似たのね……」

「ん？ 何が？」

「里美のことよ……」

外見は自分に似ているが、中身は父親に似たのねと頷く。

「しかし、捨ててきなさいか……」

そう呟くと、朗は自分の子供の頃を思い出し「ははっ」と一笑する。

「俺のお袋と同じことを言ってるよ」

「だ、だって……動物の飼うなんて、餌代はかかるし、散歩とか世話が大変じゃない」

「餌代なんて、そんなにかかるモノじゃないだろう。まあ、毎日高級缶詰とかだったらアレだけど。世話が大変って言っても、毎日ほとんど家にいるんだから、オマエにとっては良い暇つぶしになるんじゃないのか？」

朗はワイシャツを脱ぐと、莉奈を見つめる。

「な、なに？」

「てか、莉奈……最近、太ってきていないか。運動とかしてないだろう。あのゲームも埃がかぶっているし」

朗がそう言い、テレビの横に置かれているゲーム機と周辺機器のボードを指差す。

「うっ……そ、それは……その……」

人間誰しも、熱し易く冷め易いものである。

よほどのもので無ければ、長続きはしない。だから、流行というものが生まれるのだろうか…
…それはさて置き。

「犬ぐらい良いじゃないか。俺は飼っても良いと思っているよ。夢のマイホームで犬を飼って暮らす。理想の家庭像だよ。それに動物を飼うということは情操教育にもなるって言うしな」

里美にあれだけ犬は飼わないと言った手前、自分の主張を引っ込められなくなっていた。
だが……、

「まあ……アナタが、そういうなら仕方無いわね」

しかめ顔ながらも、渋々と犬を飼うことを了承した。

「よっし。それじゃ、里美を探しに行こうか。里美が俺に似ているんなら、今頃、犬と離れ離れになりたくなくて、どっかで犬と一緒にうずくまっているだろう」

「アナタもそうだったの？」

その問いに、朗は自分の名前通りの朗らかな笑顔で返した。

完全に陽は沈み、暗い空に点々と星々が煌いていた。

何処に行く当ても無かった里美たちは、先ほどみんなと遊んだ公園に居り、その時ハチと共に隠れたダンボールの中に再び入っていたのだ。

その姿は、まるで捨て犬のようだった。

五月といっても、昼に比べて気温は五度近く低くなり、半そでとショートパンツの里美は肌寒さをより感じていた。そこで里美はハチに寄り添い、ハチの温もりで寒さを凌いでいた。

ハチを飼えないのなら、このまま家に帰らないで、ここでハチと暮らしても良いかなと思い始めた時、グウ〜と腹の虫が鳴る。

「ハチ……お腹、空いたね……」

家に帰った時、カレーの匂いが漂っていたことを思い出す。

今日の晩御飯は、ママ特製のチーズカレーだったのだろう。そのカレーは里美の大好物。

「カレー……」

カレーの誘惑に負けそうになるが、隣にいるハチを見つめる。

カレーのためにハチを捨ててはいけないと、里美は我慢することを決めた。

「大丈夫。カレーよりも、私はハチを取るからね！」

すると今度は、「ふぁ〜〜あ〜〜」と大きな欠伸が出た。

学校での追いかけっこ、公園での遊んだ疲れが溜まっていたのだろう。空腹と共に睡魔が襲い

始めた。

そして里美は、ハチの温もりに心地よさを感じつつ、そっと瞼を閉じた。

ハチは眠る里美を見守るかのように、ただ黙って見つめていたのであった。

◆第八話 里美とハチ

「くっしゅん」

くしゃみで、目を覚ます里美。

そばにハチがいないことに気付き、ダンボールの中から辺りを見渡す。しかし、公園の外灯が消えたのか、真っ暗過ぎて周りはよく見えなかった。そして、変な違和感があった。

妙に静かなのだ。

さっきまで自動車が通る音や人が歩く音、喋る声などが聞こえてきたのに、今はまったくと言っていいほど何も音が聞こえなかった。

やがて暗闇に目が慣れ、少し遠くに白い物体が鎮座しているのが見えた。

ハチだ。

里美はハチの名前を呼びながら、そこへ走り寄った。

そしてハチは里美の方を振り返り、

『おや、起きたかい。お嬢さん』

渋い声で話しかけてきた。

硬直する里美。 辺りを見回してみても、人影など一つも無い。

聞き間違いと見間違いでなければ、先ほどの声の主は――

「え、ハチが喋っているの？ えっ！ えっ！ 犬って、喋れるの？」

生物学上ありえない出来事に対して、里美は混乱と驚愕で慌てふためくしかなかった。

そんな里美に、ハチは落ち着いて話しを続ける。

『私はただの犬ではない。宇宙人だからな。人間の言葉ぐらい話せるのだよ』

「宇宙人！」

突拍子の無い言葉を耳にして、じっくりハチの姿を観察するが、どこからどう見ても、

「犬なのに？」

『う、うむ、まあな……。まあ、姿などは、さほど意味無いものだ。重要なのは、外身では無く
中身だ！ 質だ！ 心だ！』

仰々しく訓示を述べるが、犬の姿では言葉の質は軽く感じた。

それよりも里美にとっては、

「でも、喋れるのは凄いよ！ 高い場所から飛んだり、木に登ったりできるのに、喋れるなんて……もしかして、世界でハチだけかも！」

『まあ、そうだろうな』

里美に褒められて、照れるハチ。

「そうだ、ハチ。喋れるのなら、ハチからママに飼ってと言ってよ。そうすれば、ママも……」

母親も感動して、飼っても良いと言うかも知れないと思った。

だが、ハチは照れ顔から、すぐさま真顔となる。しかし里美には、そのハチの表情が変化したことは解らなかった。

『里美……もう、私のことはほっといて、早く家に帰りなさい』

「え！ でも、ハチを置いて帰れないよ……ハチを飼わないと、ハチが保険所に……」

『私のことは心配するな。実は私には家庭があり、家族がいるんだ。それに保健所なんか連れていかれるほど間抜けではない』

「「えっ！」」

ハチの発言内容に、思わず大きな声をあげて驚いてしまった。

「家庭？ 家族？」

『ああ、私は結婚している。それに子供が二人もいるぞ』

「「「ええっ！」」」

さっきよりも、大きな声だった。

ハチが結婚していて、さらに子持ちだったことが、より里美を驚かせた。

「ハチって……意外と大人？」

『歳は今年で、四歳になるぞ』

犬の四歳は、人間の歳でいえば三十二歳。人間の場合、その歳で結婚して子供がいてもおかしくは無い。おかしく無いが……ハチは犬である。

そんなハチの人間らしい素性に、里美は「ぷっ」と噴出してしまう。

『何がおかしい！』

「ははっ……ご、ごめん。つい……」

『……まあ、仕方無いことだな。さて、そろそろ私は行こうかな』

「えっ……どこに行くの？」

『そうだな、たまには自分の家に戻ってみるかな』

ハチは里美に背を向け、歩き出した。

「あ、ハチ！」

後を追いかけてやろうとするも、不意に体が金縛りにあったのかのように硬直してしまい、指一つも動かさなくなった。

『里美。あの追いかけては、楽しかった。年甲斐にも無く、久々に熱くなってしまったよ。それに、あの黒っぽいパンも上手かった。ゴチになった』

前に進みいくハチの下に、一筋の光の柱が天から降り注ぐ。

次第にその光は強くなり、やがて目を開けられぬ眩しさとなった。
里美は、瞼を閉じるしかなかった。

そして、

「ハチ——————！！」

光の中に消えゆく犬の名を大声で叫んだ。

『気が向いたら、また遊びに行くよ。それじゃ達者でな、里美』

「さと...里美.....里美！」

聞き慣れた声で、自分の名前が呼ばれる。
ゆっくりと瞼を開けると、そこには――

「あれ.....ママ.....と、パパ」

莉奈と朗が里美の顔を覗かせていた。

「なに、こんな所で眠っているの？ 風邪を引くわよ」

莉奈はダンボールの中で横になっていた里美の頬を人差し指でつつき、朗は「ははっ。まるで里美が捨て犬のようだな」と感想を述べた。

里美は目をこすりながら、犬という言葉に反応する。
そして、あるものがないことに気付く。

「あれ.....ハチは？ ねえママ、ハチを知らない？」

「ハチ？ ああ、あの白い犬？ 私たちがあなたを見つけた時には、ココにはあなたしか居なかったわよ」

「えっ！」

里美は立ち上がり、辺りを見回しハチを探したが、どうやら公園には里美と里美の両親しかいないようだった。

「どっかに行ったのかな……」

朗も里美と一緒に犬らしき物体を探す。

里美は、心と先ほどの……ハチとの会話を思い出した。

あれは夢だったのかと思うも、妙な現実感があった。

もしかしたら、あれは夢では無く、本当の出来事だったのではと里美は思った。

「ハチ……帰ったんだね……」

里美はハチが居なくなったことに寂しくもあったが、家族の元に帰るんなら仕方無いと納得した。

「もう、折角、首輪を買ってきたのに……。無駄になっちゃったかな」

莉奈はビニール袋の中から首輪を取り出し、首輪をクルクルと人差し指で回した。里美を探す途中で、ハチを飼うことに備えて首輪を買っていたのであった。

「百円ショップで買ったものじゃないか。まあ、野良犬だろうし、どっかでうろついていると思うから、また見つけた時に拾ってくればいいだろう。なあ里美」

里美は朗の方を向いて、明るく答えた。

「パパ、ハチは野良犬じゃないよ。宇宙人で家族持ちのお父さんだったんだよ」

突拍子の無い発言に、朗と莉奈は思わず目が点になってしまったが、里美の冗談と思い、笑って返した。

「なに馬鹿なことを言っているんだ、里美は」

「本当だよ。ハチは、そう言ってたんだよ！」

「はいはい……」

朗と莉奈は、里美の発言を真に受けず軽く受け流す。

そうこうしていると、里美のお腹から豪快にグウ〜と腹の虫を響かせる。

「ほら、早く家に帰ってご飯にしよう。ママもお腹が空きすぎて、お腹と背中がくっつきそうよ」

「お前は、そうなった方がいいんじゃないのか？」

「うるさいっ！」

莉奈は、朗の頭を“スパッーん”と叩いた。

朗は物凄く痛そうなフリをしつつ、頭を擦る。

そんな父と母のやり取りに、里美は思わず笑みがこぼれた。

そして朗は、そっと里美の肩に手を置き、

「まあ、里美。犬にはまた会えるさあ。気を落とすなよ！」

「そうだ、里美。犬が見つかるまで、パパを犬の代わりにでもする？」

莉奈は、先ほど買った首輪を手に持ち、朗の目の前で振った。

首輪を付けた父親一朗一を散歩させる姿を想像してしまい、里美は笑い出す。

「だけどハチは、気が向いたら遊び来るって言ったから」

「そ、そうか？」

また里美が変なことを言ったために朗と莉奈は首を傾げたが、里美がそれで納得しているのなら、それで良いかと別段気に留めることはしないようにした。

「それじゃ、里美。帰りましょうか」

「うん」

里美は莉奈と朗の手を繋ぎ、ハチのことを話しながら家へと帰り行く。里美が語る内容一ハチは宇宙人一に、朗と莉奈は呆れたが、どうせ夢でも見たのだろうと胸の奥で留まらせることに

した。

里美たちが公園から出た後すぐに、反対方向に在る入り口から、子供が公園に入ってきた。そして子供は地面に這いつくばった。何かを探すかのように……。

そのことに里美たちは気付かないままで、家路を急いだのであった。

◆御開き

テーブルには、トマトとゆで卵が供えられたキャベツの千切りがメインのサラダと、朝食でも飲んだビタミンDが配合されたスーパー牛乳、そして本日の主役であるパルメザンチーズ、カマンベールチーズ、ゴルゴンゾチーズの三種のチーズがトッピングされたチーズカレーライスが並べられていた。

莉奈は、晩御飯の準備が整え終わると、

「里美、あなた。出来たわよ」

莉奈の呼びかけに、二人は一目散に椅子へと着席した。

そして手を合わせ、声を揃えて、

「「いただきます！」」」

スプーンを手に取り、勢い良く口にカレーとライスを掻っ込むんだ。口の中にカレーのスパイスの刺激と味、そしてチーズのコクが染み渡る。

「美味い！」

朗のシンプルイズベストの褒め言葉に、莉奈はにこやかに笑う。

里美もスプーンを動かす手は止まらない。

その時、テレビから放映されるコマーシャルにふと視線を向けると、その手をピタッと止め、「あっ！」と立ち上がり、テレビの前へと駆け寄った。

「どうしたの里美？」

莉奈が声をかけると、里美は笑顔を浮かべ、テレビを指差した。

「ママ、パパ。見て！ ハチがテレビに出ているよ！」

莉奈と朗も「えっ？」と驚き、慌てて席から立ち上がり、里美と一緒にテレビを注視した。

そこには、ハチとそっくりの真っ白い犬が“お父さん”と呼ばれ、家族に囲まれ一家団らんで過ご

していた。

それは、とある携帯電話のCMだった。

だが里美は、そのことを知ってか知らぬか、ハチが言っていたことが本当だったことに感無量だった。

朗と莉奈は顔を見合わせ、無邪気に喜ぶ里美の純真さに笑ってしまった。里美は、両親が笑うを気にせずに、テレビでハチの様子を見れたことに心弾まていたのであった。

終わり。

◆番外

里美がテレビに映るハチを見て、はしゃいでいた頃、夜の公園で子供が這いつくばって、お腹の虫を鳴らしながら何かを探し続けていた。

「クソ……どこだよ、どこに落としたんだよ……オレ……」

その子供は“掛布博和”だった。

掛布は何を探しているのかというと……。

掛布の両親は共働きで、今日は両親とも夜遅くまで帰ってこないことになっていた。その為、掛布の家には誰も居らず、家に入るためには鍵のかかったドアを開けなければならない。

ドアを開くための鍵を掛布は持っていたのだ、夕方までは。

おそらく、掛布が里美の補助カバンを木の枝へと投げたはずみで、ポケットの中に入れていた家の鍵を落としてしまったのだろう。

家のドアの前で鍵が無くなったことに気付き、来た道に戻りながら鍵を探していた。そして、ここに舞い戻ってきたのだった。

鍵を落とした可能性が一番高いのは、ココだろうと目星を点けたものの、外灯の僅かな明かりだけでは見通しは悪く、ましてや手の中に納まるほどの小さな物を探すのは非常に困難だった。

いつしか涙目になり、

「あん時、里美のカバンなんか、投げなければ……」

自分のしでかした愚かしい行為に後悔した。

すると、

『おい、坊主。もしかして、この鍵を探しているのか？』

声の方を振り返ると、そこには犬らしき生き物が鍵を咥えていた。

「あ！ それ、そ……！」

外灯に照らし出された、その生き物の姿を掛布はよくよく見るや、

「 「 「 「 どう、わっ——あ——— ! 」 」 」 」 」

悲鳴に似た叫び声をあげ、静寂の公園を切り裂いた。

掛布は、何を見たのか——

残念ながら、それはまた別のお話し。

今回の話しは、里美ハチ犬伝。

里美とハチ以外の“人”と“犬”のお話しは、次の機会にお楽しみください。

それは、いつか？

そうですね、それはまだ“伏”せておきます。。。

お後が宜しいようで。

里美ハチ犬伝

<http://p.booklog.jp/book/58877>

著者：和本明子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/peacepromise/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58877>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58877>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ